

新刊黃帝內經素問

十三

新刊黃帝內經素問卷第二十二

啓玄子次註林億孫奇高保衡等纂校正孫兆重改誤

○至真要大論篇第七十四

黃帝問曰五氣交合盈虛更作余知之矣六氣

分治司天地者其至何如五行主歲歲有少多故曰盈虛更作也天

元紀大論曰其始也而有餘而往不足隨之不足而往有餘從之則其義也天分六氣散主大虛

三之氣司天終之氣監地天也生化可知矣岐伯再拜

對曰明乎哉問也天地之大紀人神之通應也

天地變化人神運為中外帝曰願聞上合昭昭

雖殊然其通應則一也下合冥冥奈何岐伯曰此道之所主工之所疑

也不知其要帝曰願聞其道也岐伯曰厥陰司

天其化以風飛揚故折和氣發生萬物少陰司

天其化以熱炎蒸鬱燠故大陰司天其化以濕

雲雨潤澤津液生成少陽司天其化以火熾燥寒災陽明

司天其化以燥物化以行大陽司天其化以寒

對陽之化也○新校正云詳以所臨藏位命其

病者也用木位東方心火位南方脾土位西方

是五藏定位然六氣御五運所至氣不相得則

帝曰地化奈何岐伯曰司天同候間氣皆然六

之本自有常性故能帝曰間氣何謂岐伯曰司



左右者是謂間氣也

六氣分上下常以二氣司天

之理歲中晦各從而明之餘四氣散居左右也
故陰陽應象大論曰天地者萬物之上下左右也
者陰陽之道帝曰何以異之歧伯曰主歲者紀
路此之謂也

歲間氣者紀步也

一歲三百六十五日餘八十七刻半

也猜步之日帝曰善歲主奈何歧伯曰厥陰司

天為風化

巳亥之歲風高氣遠在泉為酸化

之歲木司地氣

司氣為蒼化

木運之氣丁壬間

氣為動化

偏主六十日餘八十七刻半也

子午之歲為二之氣辰戌之歲少陰司天為熱

為四之氣卯酉之歲為五之氣在泉為苦化

火司地氣

不司氣化

君不主運

以各相火以位謂

居氣為灼化

六十七刻半也

位君火為主運也

不當間也

當間之也王註云居本位為居不當間之則居

未之歲為二之氣巳亥之歲為大陰司天為濕

四之氣辰戌之歲為五之氣在泉為甘化

化雲雨潤濕之化也

氣先焉司氣為斡化

化先焉司氣為斡化

列之歲為四之氣巳少陽司天為火化

火之化也

氣為丹化戊火運之氣間氣為明化明初明出也

校正云詳少陽之歲為初之氣且未之歲為五

氣陽明司天為燥化卯酉之歲清切高明在泉

為辛化子午之歲也司氣為素化金運之

也歲間氣為清化風生高勁草木清冷清之化也

為初之氣辰戌之歲為二之氣寅申之歲

為寒化辰戌之歲嚴肅峻整在泉為鹹化

丑未之歲水同司氣為玄化水運之氣間氣為

藏化陰凝而冷庶物斂容歲之化也新校正云

二之氣卯酉之歲為四之氣故治病者必明六化

分治五味五色所生五藏所宜迺可以言盈虛

病生之緒也帝曰厥陰在泉而酸化先

余知之矣風化之行也何如歧伯曰風行于地

所謂本也餘氣同法厥陰在泉風行于地少陰

濕行于地少陽在泉火行于地故曰餘氣同法也本

謂六氣之本乎天者天之氣也本乎地者地之

氣也校正云按易曰天氣上於地地氣下降

親下也天地合氣六節分而萬物化生矣居天

地之間悉為六氣所生也陰陽也故曰謹候氣宜

無失病機此之謂也病機下帝曰其主病何如

言采藥也歧伯曰司歲備物則無遺主矣謹候司

之歲也生化者則其味正當其歲也故彼藥上專司歲

氣所收藥物則一歲二歲其所主用無遺畧也

○今詳則帝曰先歲物何也歧伯曰天地之專

精也專精之氣藥物肥濃又於使用當其正氣

帝曰司氣者何如司運歧伯曰司氣者主歲同

然有餘不足也五運主歲者有餘不足比之歲

帝曰非司歲物何謂也歧伯曰散也散氣散氣

則物故質同而異等也則異故不尚之用氣味有

薄厚性用有躁靜治保有多少力化有淺深此

之謂也物与歲不同帝曰歲主藏害何謂歧伯

曰以所不勝命之則其要也木不勝金金不帝

曰治之奈何歧伯曰上淫于下所勝平之外淫

于內所勝治之淫謂行所不勝已者也上淫于

也隨所制勝而以平治之也制勝謂五味寒熱

溫涼隨勝用之下文備矣○新校正云詳天氣

主歲雖有淫勝但當平調帝曰善平氣何如謂

之氣平和歧伯曰謹察陰陽所在而調之以平為

期正者正治反者反治知陰陽所在則知陰陽所

在則以得為失以逆為從故謹察之也陰病陽

不病陽病陰不病是為正病則正治之謂以寒

治熱以熱治寒也陰位已見陽脈陽位又見陰

脈是謂反病則反治之謂以寒治寒以熱治熱

然故曰方之制咸悉不帝曰夫子言察陰陽所在

而調之論言人迎與寸口相應若引繩小大齊

等命曰平新校正云詳論言至曰平本靈樞之文今出甲乙經云寸口主中入迎主外兩

者相應俱往俱來若引繩小大齊等春陰之所在

寸口何如陰之所在脈沉不應引繩齊岐伯曰視歲

南北可知之矣帝曰願卒聞之岐伯曰北政之

歲少陰在泉則寸口不應木火金水運面北受

悉不見唯其左右之氣脈可見之在泉之氣善

則不見惡者可見病以氣及客主淫勝名之在

泉則左不應少陰在南政之歲少陰司天則寸

口不應土運之歲面南行令故少陰厥陰司天

則右不應大陰司天則左不應亦左右諸不應

者反其診則見矣不應皆為脈沉脈沉下者

為大帝曰尺候何如岐伯曰北政之歲三陰在

下則寸不應三陰在上則尺不應司天曰上下南

政之歲三陰在天則寸不應三陰在泉則尺不

應左右同尺不應寸不應義同故曰知其要者一

言而終不知其要流散無窮此之謂也要謂知

在也知則用之不惑不知則尺寸之氣沈浮小

大常三歲一差欲求其意猶遊樹間按金白首

區二尚未知所請况帝曰善天地之氣內淫而

病何如岐伯曰歲厥陰在泉風淫所勝則地氣

不明平野昧草廼早秀民病洒洒振寒善伸數

欠心痛支滿兩脇裏急飲食不下噯咽不通食

則嘔腹脹善噫得後與氣則快然如衰身體皆

重謂甲寅丙寅戊寅庚寅壬寅甲申丙申戊申庚申壬申

昏暗風行地上故平野皆然昧謂暗也骨謂兩

乳正云及按甲乙經酒二振寒善伸數欠為胃病

食則嘔腹脹善噫得後與氣則快然如衰

身體皆重為脾病飲食不下噯咽不通邪在胃

管也蓋厥陰在泉之歲木王而尅脾胃故病如

是又按脈解云所謂食則快然如衰者十二

故嘔也所謂得後與氣則快然如衰者十二月

陰氣下衰而陽氣且出故曰歲少陰在泉熱淫

得後與氣則快然如衰也

所勝則滔浮川澤陰處反明民病腹中常鳴氣

上衝胃喘不能久立寒熱皮膚痛目瞑齒痛頰

腫惡寒發熱如瘡少腹中痛腹大蟄蟲不藏謂

卯丁卯己卯辛卯癸卯乙酉丁酉己酉辛酉

謂心氣不足也金火相薄而為是也○新校正

云按甲乙經齒痛頰腫為大腸病腹中雷鳴氣

上衝胃喘不能久立卯在大腸也蓋歲大陰在

少陰在泉之歲火尅金故大腸病也

泉草乃早榮此新校正云詳濕淫所勝則埃昏巖

谷黃反見黑至陰之交民病飲積心痛耳聾渾

渾焯焯噤腫喉痺陰病血見少腹痛腫不得小

便病衝頭痛目似脫項似拔腰似折髀不可以

回膈如結喘如別謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

甲戌丙戌戊戌庚戌壬戌

謂甲辰丙辰戊辰庚辰壬辰

也。大陰為土色，見應黃於天中，而反見於北方。黑頭也。水土同見，故曰至陰之交，合其氣色也。衝頭痛，謂腦後眉間痛也。新按：正云按甲乙經之中，也。腦脈後軟肉處也。○新按：正云按甲乙經之中，聾。渾渾，項以拔腰，以折解，不可以回。胸如結，喘。目似脫，項以拔腰，以折解，不可以回。胸如結，喘。如別為膀胱，足大陽病，又少腹腫痛，不得小便。如是在三焦，蓋大陰在泉，之歲，土王，鬼大陽，故病。戈麥切。○胸。歲少陽在泉，火淫所勝，則焰明郊野。寒熱更至，民病注泄赤白，少腹痛溺赤，甚則血。便少陰同候。丁謂乙巳丁巳己巳辛巳癸巳乙亥。時熱更至也。餘候與少陰在泉，蓋同。歲陽明在。云更至也。餘候與少陰在泉，蓋同。歲陽明在。泉燥淫所勝，則霧霧清曠，民病喜嘔，嘔有苦善。大息心脇痛，不能反側，甚則噎乾面塵，身無膏。

澤足外反熱。謂甲子丙子戊子庚子壬子甲午。霧暗不分，似霧也。清薄寒也。言霧起，霧暗不辨。物形而薄寒也。心脇痛，謂心之傍脅中痛也。面。塵謂面上如病，喜嘔，嘔有苦善。大息也。○新按：正云。反側甚，則面塵，身無膏。澤，月外反熱，為臆病。益。乾面塵，為肝病。蓋陽明在泉，之歲，金旺，故木。病如。是又按脈解云：少陽所謂心脅痛者，言少。陽盛也。盛者，心之所衰也。九月陽氣盡，而陰氣。藏物也。物藏，不得動，故不可反側也。○歲大陽在。

泉寒淫所勝，則凝肅慘慄，民病少腹控，舉引腰。脊上衝，心痛，血見，噎痛，頰腫。謂乙丑丁丑己丑。未已未辛未癸未。歲也。凝肅，謂寒氣。霧空，凝而。不動。萬物靜，南其儀服也。慘慄，寒甚也。控引也。畢陰丸也。頰頰腫，為小腸病。又小腹控，舉引。甲乙怨，盛痛，頰頰腫，為小腸病。又小腹控，舉引。

脊上衝心特邪在小腸也蓋大帝曰善治之柰

陽在泉之歲水尅火故病如是

何岐伯曰諸氣在泉風淫于內治以辛涼佐以

苦以甘緩之以辛散之風性喜溫而惡清故治之涼是以勝氣治之也

佐以苦隨其所利也木苦急則以甘緩之若抑

則以辛散之藏氣法時論曰苦急食甘以

饗之肝欲散急食辛以散之謂也食亦音

餽已曰食他曰飼也大法正味如此諸為方者

不必忍用之但一佐二熱淫于內治以鹹寒佐

佐病已則止餘氣皆然

以甘苦以酸收之以苦發之熱性惡寒故治以寒也熱之大盛甚

於表者以苦發之寒制之寒制之不可復

苦發之以酸收之甚者再方微者一方可復必

已時發時止濕淫于內治以苦熱佐以酸淡以

亦以酸收之濕與燥反故治以苦熱佐以

苦燥之以淡泄之酸淡也燥除濕故以苦燥其

濕也淡利竅故以淡泄泄也藏氣法時論曰

苦濕急食苦以燥之靈樞經曰淡利竅也生

通天論曰味過於苦脾氣不濡胃氣乃厚明苦

燥也○新校正云按天元正紀大論曰下大陰

其化下火淫于內治以鹹冷佐以苦辛以酸收

之以苦發之火氣大行心腹心熱之所生也鹹

候其須汗者以辛佐之不必發其味令其

汗也欲柔粟者以鹹治之藏氣法時論曰心欲

粟急食酸以收之此之謂也燥淫于內治以苦溫

急食酸以收之此之謂也燥淫于內治以苦溫

佐以甘辛以苦下之謂利涼性故以苦作之下

正云按藏氣法時論曰肺苦氣上逆急食苦以

泄之以辛寫之酸補之又按下文司天燥淫所

勝佐以酸辛此云甘辛者其字疑當作酸天元

正紀大論云下酸熱与苦溫之治又異又云以

酸收之而安其下寒淫于內治以甘熱佐以苦

其則以苦泄之

辛以鹹寫之以辛潤之以苦堅之以熱治寒是為推勝於其

氣用令不滋繁也苦辛之佐通事行之口新按正云按藏氣法時論曰腎苦燥急食辛以潤之腎欲堅急食苦以堅之用苦補之職寫之舊注引此在泄泄了內之下无義今移於此帝

曰善天氣之變何如岐伯曰厥陰司天風淫所

勝則大虛埃昏雲物以擾寒生春氣流水不冰

民病胃脘當心而痛上支兩脇滿咽不通飲食

不下舌本強食則嘔冷泄腹脹泄痕水閉蠱

蟲不去病本于脾謂乙巳丁巳己巳辛巳癸巳

也是歲民病集於中也風自天行故大虛埃起風動飄蕩故雲物擾也埃青塵也不分速物是為埃昏土之為病其善泄利若病水則小便閉而不下若大泄利則經水亦多閉經也口新按

正云按甲乙經舌本強食則嘔腹脹泄痕水閉為脾病只胃病者腹脾脹胃管當心而痛上

支兩脅滿咽不通食飲不下蓋厥陰司天之歲木勝土故病如是衝陽絕死不

治衝陽在足跗上動脈應手胃之氣也衝陽脈

也攻之不入養之不生邪氣日除少陰司天熱

淫所勝怫熱至火行其政民病胃中煩熱嗌乾

右脘滿皮膚痛寒熱欬喘大雨且至唾血血泄

孰衄嘔嘔溺色變甚則瘡瘍胎腫肩背臂臑及發

中痛心痛肺脹腹大滿臃腫而喘欬病本于肺

謂甲子丙子戊子庚子壬子甲午丙午戊午庚

午壬午歲也怫熱至是火行其政乃午是歲民病集於右蓋以小腸通心故也病自肺生故曰病本于肺也口新按甲乙經溺色變肩

青臂... 及缺盆中... 筋脈... 滿... 而喘... 為肺
病... 如... 又... 工... 江... 民... 筋... 集... 於... 右... 以... 小... 腸... 通... 心... 故... 按...
甲... 乙... 經... 大... 腸... 附... 脊... 左... 環... 回... 腸... 附... 脊... 右... 環... 所... 說... 不...
應... 得... 非... 火... 盛... 尅... 金... 而... 尺... 澤... 絕... 死... 不... 治... 尺... 澤... 左... 用...
大... 腸... 病... 故... 腦... 昏... 盲... 切... 尺... 澤... 絕... 死... 不... 治... 尺... 澤... 左... 用...
戶... 動... 脈... 應... 手... 肺... 之... 氣... 也... 火... 燥... 於... 金... 承... 天... 之... 命... 金...
氣... 內... 滯... 故... 必... 危... 亡... 尺... 澤... 不... 至... 肺... 氣... 已... 絕... 榮... 衛... 之...
內... 喘... 生... 之... 河... 有... 哉... 大... 陰... 司... 天... 濕... 淫... 所... 勝... 則... 沈... 陰...
且... 布... 雨... 變... 枯... 槁... 肘... 腫... 骨... 痛... 陰... 痺... 陰... 痺... 者... 按... 之... 不...
得... 腰... 脊... 頭... 項... 痛... 時... 眩... 大... 便... 難... 陰... 氣... 不... 用... 飢... 不... 欲...
食... 欬... 唾... 則... 有... 血... 心... 如... 懸... 病... 本... 于... 腎... 已... 謂... 乙... 丑... 丑... 丑...
且... 乙... 未... 丁... 未... 巳... 未... 辛... 未... 癸... 未... 辰... 也... 沈... 又... 也... 腎... 氣...
受... 邪... 水... 無... 能... 潤... 下... 焦... 枯... 涸... 故... 大... 便... 難... 也... 口... 新... 按...
正... 云... 按... 甲... 乙... 經... 飢... 不... 用... 食... 欬... 唾... 則... 有... 血... 心... 懸... 如...
飢... 狀... 為... 腎... 病... 又... 邪... 在... 腎... 則... 骨... 痛... 陰... 痺... 陰... 痺... 者... 按... 之... 不...

同大二

十一

之... 而... 不... 得... 腹... 脹... 胃... 痛... 大... 便... 難... 有... 背... 頸... 項... 強... 大... 谿...
痛... 時... 眩... 蓋... 大... 陰... 司... 天... 之... 歲... 上... 壯... 水... 故... 病... 如... 是... 大... 谿...
絕... 死... 不... 治... 大... 谿... 在... 足... 內... 踝... 後... 跟... 骨... 上... 動... 脈... 應... 手...
正... 用... 矣... 故... 方... 少... 陽... 司... 天... 火... 淫... 所... 勝... 則... 溫... 氣... 流... 行...
金... 政... 不... 平... 民... 病... 頭... 痛... 發... 熱... 惡... 寒... 而... 瘡... 熱... 上... 皮... 膚...
痛... 色... 變... 黃... 赤... 傳... 而... 為... 水... 身... 面... 肘... 腫... 腹... 滿... 仰... 息... 泄...
注... 赤... 白... 瘡... 瘍... 欬... 唾... 血... 煩... 心... 背... 中... 熱... 甚... 則... 軌... 衄... 病...
本... 于... 肺... 謂... 甲... 寅... 丙... 寅... 戊... 寅... 庚... 寅... 壬... 寅... 申... 寅... 庚... 寅... 申... 寅... 庚... 寅... 申... 寅...
受... 邪... 故... 曰... 金... 政... 不... 平... 也... 火... 來... 用... 事... 則... 金... 氣...
熱... 內... 燔... 水... 无... 能... 救... 故... 化... 生... 諸... 病... 也... 制... 火... 之... 客... 則...
已... 矣... 口... 新... 按... 正... 云... 按... 甲... 乙... 經... 飢... 不... 用... 食... 欬... 唾... 則... 有... 血... 心... 懸... 如...
發... 寒... 熱... 蓋... 少... 陽... 司... 天... 之... 歲... 上... 壯... 水... 故... 病... 如... 是... 大... 谿...
天... 府... 絕... 死... 不... 治... 寸... 之... 三... 寸... 動... 脈... 應... 手... 肺... 之... 氣... 也...

火勝而金陽明司天燥淫所勝則木迺晚榮草

脈絕故死

迺晚生筋骨內變民病左肢脇痛寒清于中感

而癰大涼革候欬腹中鳴注泄驚溇名木斂生

苑下下草焦上首心脇暴痛不可反側嗌乾面

塵腰痛丈夫癰疝婦人少腹痛目昧背瘍瘡瘞

癰蟄蟲來見病本于肝謂乙卯丁卯巳卯辛卯

酉癸酉歲也金勝故草木晚生榮也配於人身

則筋骨內應而不用也大涼之氣變易時候則

人寒清發於中內感寒氣則為痠瘡也大腸居

右肺氣通之今肺氣內淫肝居于左故在應脅痛

如刺割也其歲民白注泄則无淫勝之疾也大

涼次寒也大涼且甚陽氣不行故木容次斂草

榮悉晚生氣已升陽不布令故行積生氣而結

於下也在人之應則少腹之內痛氣君之發然

於仲夏暑瘍之疾猶及秋中瘡瘞之患生於上

腫之類生於下瘡色雖赤中心正白物毒之常

也○新校正云按甲乙經臂痛不可以悅仙丈

夫癰疝婦人少腹腫甚則嗌乾面塵為肝病又

胃滿洞泄為肝病又心胃痛不能反測目兌時

痛缺盆中腫痛掖下腫馬心挾汗出振寒瘧

為臆病蓋陽明司天之歲金剋木故病如是又

按脈解云厥陰所謂癰疝婦人少腹腫者厥陰

者辰也三月陽中之陰邪在中故大衝絕死不

曰癰疝少腹腫也連殂木以寸脈動應手用之

治大衝在足大指本熱後二寸脈動應手用之

也大陽司天寒淫所勝則寒氣反至水且冰血

變于中發為癰瘍民病噦心痛嘔血血泄斂衄

善悲時眩仆連火炎烈雨暴迺電胃腹滿手熱

肘攣掖腫心澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

澹澹大動胃脇胃腕不安面赤目

濕淫所勝平以苦熱佐以酸辛以苦燥之以淡

泄之濕氣所淫皆為腫滿但除其濕腫滿自衰

上以苦吐之濕氣在下以苦泄之以淡滲之則

皆燥也泄謂滲泄以利水道下小便為法然酸鹹

非其法也○新按正云按濕淫于內佐以酸淡

此云酸辛者濕上甚而熱治以苦溫佐以甘辛

以汗為故而止身半以上濕氣餘少氣復鬱

表流汗而祛之故云以火淫所勝平以鹹冷佐

以苦甘以酸收之以苦發之以酸復之熱淫同

平以苦濕佐以酸辛以苦下之制燥之勝必以

味也寒下必以苦宜補必以酸宜寫必以辛清

甚生寒留而不去則以苦溫下之氣有餘則以

辛寫之諸氣同○新按正云按上文燥淫于內

治以苦溫此云苦溫當為溫文注中溫字三

並當作溫又按六元正寒淫所勝平以辛熱佐

紀大論亦作苦小溫正寒淫所勝平以辛熱佐

以苦甘以鹹寫之淫散止之不可過也○新按

甘熱佐以苦辛此云平以辛熱佐以甘苦者此

文為誤又按六元正紀大論云大陽之政歲宜

苦以帝曰善邪氣反勝治之柰何不能淫勝於

-12 90 31 915" data-label="Text">

邪以勝之岐伯曰風司于地清反勝之治以酸

溫佐以苦甘以辛平之厥陰在泉則風司于地

勝盛故先以酸寫佐以苦甘和氣熱司于地寒

-12 90 31 915" data-label="Text">

退則正氣虛故以辛補養而平之熱司于地寒

反勝之治以甘熱佐以苦辛以鹹平之少陰在

泉則熱

司于地謂五卯五酉歲也先濕司于地熱反勝

之治以苦冷佐以鹹甘以苦平之大陰在泉則

五辰五戌歲也補火司于地寒反勝之治以甘

熱佐以苦辛以鹹平之少陽在泉則火司于地

司于地熱反勝之治以平寒佐以苦甘以酸平

之以和為利陽明在泉則燥司于地謂五子五

冷熱和平寒司于地熱反勝之治以鹹冷佐以

甘辛以苦平之大陽在泉則寒司于地謂五丑

勝法殊貫其云治者寫客邪之勝氣也云佐亦

曰其司天邪勝何如岐伯曰風化於天清反勝

之治以酸溫佐以甘苦歲已亥熱化於天寒反勝

之治以甘溫佐以苦酸辛子午濕化於天熱反

勝之治以苦寒佐以苦酸日未火化於天寒反

勝之治以甘熱佐以苦辛寅申燥化於天熱反

勝之治以辛寒佐以苦甘如酉寒化於天熱反

勝之治以鹹冷佐以苦辛辰戌帝曰六氣相勝

奈何先率其岐伯曰厥陰之勝耳鳴頭眩憤憤

欲吐胃滿如寒大風數舉保蟲不滋肢膈氣并

化而為熱小便黃赤胃脘當心而痛上支兩脇

腸鳴殄泄少腹痛注下赤白甚則嘔吐藹咽不

通五巳五亥歲也心下齊上胃之分胃萬謂胃

偏着一邊萬咽謂食飲入而後出也。新校正云按甲乙經胃病者胃脘當心而痛上支兩脇

不通萬咽少陰之勝心下熱善飢齊下反痛氣遊三

焦炎暑至木迺津草迺萎嘔逆躁煩腹滿痛泄

泄傳為赤沃五子五年午歲大陰之盛火氣內鬱

瘡瘍於中流散於外病在肢脇甚則心痛熱格

頭痛喉痺項強獨勝則濕氣內鬱寒迫下焦痛

留頂互引眉間腎滿兩數至燥化迺見少腹痛

腰腫重強肉不便善注泄足下溫頭重足脛附

腫飲發於中附腫於上五丑五未歲也勝於

則寒迫下焦水溢河渠則鱗虫離水也附腫於上

肉也。不便謂腰重內強直歪伸不利也。獨勝謂

鬱所生也。○新校正云詳注云水溢河渠則

虫離水也。王作此注於經文无所解。又按大陰

之復云大雨時行鱗見於陸則此文於兩數至

然則王注無因為解也少陽之勝熱客於胃

煩心心痛目赤欲嘔嘔酸善飢耳痛溺赤善驚

譖妄暴熱消燦草萎水涸介蟲迺蝨少腹痛下

沃赤白五寅五申歲也熱暴甚故草萎水涸陰

醞水也陽明之勝清發於中左肢脇痛溇泄內

為噎寒外發癩疝大涼肅殺華英改容毛蟲迺

殃背中不便噎寒而發五卯五酉歲也大涼肅

英為殺氣損削改易形容而焦其上首也毛蟲
木化氣不宜金故金政大行而毛虫死其也肝
木之氣下主於陰故大涼行而癩疔發也胃中
不便謂呼吸轉或痛或緩急而不利便也氣
大盛故嗌塞而欬也嗌謂喉也
下接連脊中肺兩葉之問也
大陽之勝凝栗

且至非時水冰羽迺後化痔瘡發寒厥入胃則
內生心痛陰中廼瘍隱曲不利互引陰股筋肉

拘苛血脈凝泣絡滿色變或為血泄皮膚否腫

腹滿食減熱反上行頭項匈項腦戶中痛目如

脫寒入下焦傳為濡寫五辰五戌歲也寒氣交

而止水米結也水氣大勝陽火不行故諸羽蟲
生化而後也拘急也苛重也絡絡脈也太陽之
氣標在於巔故熱反上行於頭也以其疎起於
目內皆上額交巔上入絡腦還出別下項故內

頂及腦戶中痛目如欲脫也濡謂水利也心齋
校正云按甲乙經痔瘡頭項匈項及腦戶中痛
目如脫為帝曰治之柰何岐伯曰厥陰之勝治

以甘清佐以苦辛以酸寫之少陰之勝治以辛

寒佐以苦鹹以甘寫之大陰之勝治以鹹熱佐

以辛甘以苦寫之少陽之勝治以辛寒佐以甘

鹹以甘寫之陽明之勝治以酸溫佐以辛甘以

苦泄之大陽之勝治以甘熱佐以辛酸以鹹寫

之六勝之至皆先歸其不勝已者之故不勝者

當先寫之以通其道以寫所勝之氣令其退

釋也治諸勝而不寫遺之則勝氣侵盛內生諸

病也新校正云詳此為治時先寫其不勝而
後寫其來勝獨大陽之勝治以甘熱則六勝之治皆
字苦之誤也若云治以苦熱則六勝之治皆

也貨帝曰六氣之復何如復謂報復報其勝也凡

止云按玄珠云六氣分正化對化厥陰正司於

亥對化於巳少陰正司於午對化於子大陰正

司於未對化於丑少陽正司於寅對化於申陽

明正司於酉對化於戌大陽正司於成對化於

辰正司於亥之實對司化令之虛對化勝而

復正化勝而不復此註云凡先有勝後必復

然岐伯曰悉乎哉問也厥陰之復少腹堅滿裏

急暴痛偃木飛沙裸蟲不榮厥心痛汗發嘔吐

飲食不入入而復出筋骨掉眩清厥甚則入脾

食痺而吐裏腹腸之內也木偃沙飛風之大也

謂而委及心也胃受逆氣而上攻心痛也痛甚

則汗發泄掉謂肉中動也清取手足冷也食痺

謂食已心下痛陰陰然不可名也不可忍也吐

出乃止此為胃氣逆而不下流也食飲不入入

而復出肝乘脾衝陽絕死不治善陽胃少陰之

復燠熱內作煩躁欬噴少腹絞痛火見燔炳噓

燥分注時止氣動於左上行於右致皮膚痛暴

瘖心痛鬱冒不知人迺洒淅惡寒振慄譫妄寒

已而熱渴而欲飲少氣骨萎隔腸不便外為浮

腫噦噫赤氣後化流水不冰熱氣大行介蟲不

福病痹脗瘡瘍癰疽瘰疬甚則入肺欬而鼻淵

火熱之氣自小腸從齊下之左入大腸上行至

左脅其則上行於右而入肺故動於左上行於

右皮膚痛也分注謂大小俱下也骨萎言骨弱

無力也隔腸謂腸如隔絕而不便也寒熱甚

則然陽明先勝故赤氣後化流水不冰少陰之

本司於地也在人之應則冬肺不凝若高山陰

之

之

谷已 是至高之處 水亦常平 下川流則如經
矣 火氣內蒸 金氣外拒 陽熱內鬱 故為邪熱
湯 於甚亦為瘡也 熱少則外生 邪熱多則內
結 癰腫小腸有熱 則戶外為痔 其復熱之變皆
病 於身後及外側也 瘡瘍皆生於上 天府絕
死 不治 天府肺氣也 新校正云 按上文少
司 天火淫所勝 天府絕死 不治 此云少陰之復
天 如相死 不治 下文少陽之復 尺澤絕死 不治
大 陰脈之所發動 故此互文也 大陰之復 濕變
廼 舉體重中 滿食飲不化 陰氣上厥 胃中不便
飲 發於中 欬喘有聲 大雨時行 鱗見於陸 頭頂
痛 重而掉 顛尤甚 嘔而密 默唾吐清液 甚則入
腎 然為無度 是病頭頂痛 重則腦中掉 顛尤甚 腸

胃寒 溫熱 无所行 重灼胃府 故胃中不便 食飲
不 化 溫熱 而密 默飲 靜定也 喉中息 道不利 故欬喘
液 也 寒氣 易位 上入肺 喉則息 道不利 故欬喘
而 喉中 有聲 也 水居 平澤 則魚 遊於市 頭頂 昏
痛 女人 亦發 痛於 眉間 也 新 校正 云 按上文
大 陰在 泉頭 痛項 似拔 又大 陰司 天云 頭頂 痛
頂 疑當 大 谿絕 死 不治 大 谿腎 少 陽之 復 大 熱
作 頂 當 大 谿絕 死 不治 大 谿腎 少 陽之 復 大 熱

將 至 枯 燥 燔 燻 介 蟲 廼 耗 驚 癩 欬 衄 心 熱 煩 燥
便 數 憎 風 厥 氣 上 行 面 如 浮 埃 目 廼 潤 癩 火 氣
內 發 上 為 口 糜 嘔 逆 血 溢 血 泄 發 而 為 瘡 惡 寒
鼓 慄 寒 極 反 熱 啞 絡 焦 槁 渴 引 水 漿 色 變 黃 赤
少 氣 脈 萎 化 而 為 水 溥 為 肘 腫 甚 則 入 肺 欬 而
血 泄 火 氣 專 暴 枯 燥 草木 燔 槁 自 生 故 燔 槁 也
血 泄 火 氣 專 暴 枯 燥 草木 燔 槁 自 生 故 燔 槁 也

也。火炎於上則男物失色，故如塵埃浮於面而
目瞶動也。火燎於內則口舌糜爛，嘔逆及為血
溢，血出則風火相薄，則為溫瘧。氣蒸熱化則為水
病，傳為肺腫，則謂皮肉俱腫，按之陷下，泥而不
起也。如是之證，尺澤絕死不治。尺澤，肺氣也。陽明之
皆火氣所生也。

復清氣大舉，森木蒼乾，毛蟲廼厲，病生肱脇，氣
歸於左，善大息，甚則心痛，否滿腹脹而泄嘔苦

欬噦煩心，病在萯中，頭痛甚則入肝，驚駭筋攣

殺氣大，草木不勝之故，蒼青之葉不及黃而乾，燥也。屬謂斑癘疾疫死也。清甚於內，熱鬱於外，故大衝絕死不治。大陽之復，厥氣上行

水凝，雨冰，羽蟲廼死，心胃生寒，脊中不利，心痛
否滿，頭痛善非，時眩仆，食減，腰胫反痛，屈伸不

問九二

九

便地裂，水堅，陽光不治，少腹控臑，引腰脊，上衝

心唾，出清水，及為噦噫，其則入心，善忘，善悲，水

謂雷也。寒而遇雷，死亦其宜。寒化於地，其上復土，熱地體分裂，水積米堅，久而不釋，是陽光之氣不治，寒凝之物也。大陽之復，與不相持，上虛下寒，火牙所往，心氣內鬱，熱由是生，火熱內熾，故生斯病。新校正云：詳注神門絕死不治。

神門絕死不治。神門，心氣也。帝曰：善治之奈何？復氣倍勝，故岐伯曰：厥

陰之復，治以酸，寒佐以甘辛，以酸寫之，以甘緩

之。不大緩之，夏猶不已，復重於勝，故治以辛寒也。新校正云：按別本治以酸寒，作治以辛

也。少陰之復，治以鹹，寒佐以苦辛，以甘寫之，以

酸收之，以苦發之，以鹹熯之。不大發汗，以寒攻之，持至伸，熱內

伏蒸而為心熱少氣少力而不
能起矣熱伏不散歸於骨也 大陰之復治以

苦熱佐以酸辛以苦寫之燥之泄之不燥泄之

腫腹滿閉即不利喘及伏兔那少陽之復治以

鹹冷佐以苦辛以鹹栗之以酸收之辛苦發之

發不遠熱無犯溫涼少陰同法不發汗以奪盛

同支而為解外不可各也調熱不甚調寒不甚

謂強不甚謂弱不甚不可各也調熱不甚調寒不甚

粗醫呼為鬼氣惡病也父父不已則骨熱熱濕

齒乾乃為骨熱病也發汗奪陽故无留熱故發

汗者雖熱生病夏月及差亦用熱藥以發之當

春秋時縱火熱盛亦不得以熱藥發汗汗不發

而藥熱內甚助病為瘡逆犯神靈故曰无犯溫

涼少陰氣熱為瘵則同故云與少陰同法也數

奪其汗則津液竭涸故以酸收以鹹潤也○陽

新校正云按六元正紀大論云發表不遠熱

明之復治以辛溫佐以苦甘以苦泄之以苦下

之以酸補之泄謂滲泄汗及小便湯浴皆是也

勝法或不已亦湯漬和其中外也怒復之後大

其氣皆虛故補之以安全其氣餘復治同大

陽之復治以鹹熱佐以甘辛以苦堅之不堅則

變止而復發發而復止治諸勝復寒者熱之熱

綿歷年歲生大寒疾者寒之溫者清之清者溫之散者收之抑者散

之燥者潤之急者緩之堅者栗之脆者堅之衰

者補之強者寫之各安其氣必清必靜則病氣

衰去歸其所宗此治之大體也大陽氣寒少陰

氣溫陽明氣清大陰氣溫有勝復則各倍其氣

以調之故可使平也宗屬也調不失理則餘之

氣自歸其所屬少之氣自安其所居勝復衰已
則各補養而平定之必清必靜无妄挽之則六
氣循環五神安泰若運氣之寒熱帝曰善氣之
治之平之亦各歸司天地氣也

上下何謂也歧伯曰身半以上其氣三矣天之
分也天氣主之身半以下其氣三矣地之分也

地氣主之以名命氣以氣命處而言其病半所

謂天樞也是以君中為義過天中也或以腰為身半

悉如此矣當伸臂指天舒足指地以繩量之中

正當齊也故又曰半所謂天樞也天樞正當齊

兩傍同身寸之二寸也其氣三三假如少陰司

天者其氣三三司地者其氣三三故身半以上三氣

身半以下三氣也以各言其氣以氣言其處以

氣居足及股脛之內則上行於少腹循膈足陽

明氣在足之上所之外股之前上行膈齊之傍

循脊光上而足大陽氣起於目上額絡頭下項

背過雙橫過解權股後下行入膈貫膈出外

之後足小指外側足少陰循耳至目銳眥在首之

測上行腹脅之前足少陰循耳至目銳眥在首之

測此足六氣之部主也手厥陰少陰大陰氣從

心首橫出循臂內側至中指小指大指之端手

陽明少陽太陽氣並起于中指循臂外側上肩及

甲在上頭此手六氣之部主也欲知病診當隨氣

所歸之以言之當陰之分冷病歸之當陽之分熱
病歸之或勝復之作先言病生寒熱者必依此
物理也新枝正云按六氣自大論云天樞之分
上天氣主之天樞之下地氣主之氣交之分入
之氣從故上勝而下俱病者以地名之下勝而上
俱病者以天名之暢而无所行進則困於下勝至
退則窮於沸塞故上勝下病地氣鬱也故從地勝至

名地病下勝上病天氣塞也故從天氣塞以名天
病夫以天名者方順天氣為制逆地氣而攻之
以地名者方從天氣為制則可假如陽明司大
少陰在泉上勝而下俱病者是佛於下而生也
天氣正勝天可逆之故順天之氣方同清也少
陰等司天上下勝同法。新校正云按六元正
紀大論云上勝則天氣降而下所謂勝至報氣
下勝則地氣遷而上此之謂也
盈伏而未發也復至則不以天地異名皆如復
氣為法也勝至未復而病生以天地異名為式
皆依復氣為病復氣已發則所生無問上勝下勝悉
寒熱之主也帝曰勝復之動時有常乎氣有
必乎歧伯曰時有常位而氣無必也雖位有常
無不必帝曰願聞其道也歧伯曰初氣終三氣
天氣主之勝之常也四氣盡終氣地氣主之復

何如

岐伯

曰

之常也有勝則復無勝則否帝曰善復已而勝
何如歧伯曰勝至則復無常數也衰迺止耳
則復微故復已而又勝勝甚則復甚故復已則
少有再勝者也假有勝者亦隨微甚而復之
然勝復之道雖無常數至復已而勝不復則害
其衰謝則勝復皆自止也
此傷生也有勝無復是復氣已衰衰不能復帝
曰復而反病何也歧伯曰居非其位不相得也
大復其勝則主勝之故反病也捨已宮觀過於
主不相得然隨其後唯便是求故所謂火燥熱
力極而復主反襲之反自病者也
也少陽火也陽明燥也少陰熱也少陰少陽在
其勝則火主勝之火復其勝則水主勝之餘氣
勝復則無主勝之病氣也故又曰所謂火燥熱

也帝曰治之柰何歧伯曰夫氣之勝也微者隨之甚者制之氣之復也和者平之暴者奪之皆隨勝氣安其屈伏無問其數以平為期此其道也隨謂隨之安謂順勝氣以和之也制謂制止也平謂平調奪謂奪其勝氣也治此者不以數之多少但以氣平為準度爾帝曰善客主之勝復柰何客謂六氣主謂五行之位也氣岐伯曰客主之氣勝而有宜否故各有勝復之者岐伯曰客主之氣勝而無復也其為主自有多少以常勝為帝曰其逆從何如岐伯曰主勝逆客勝從天之道也客承天命令高之下固宜祇奉天命不順而勝則天命不行故為逆也客勝於主承天而行理之道故為順也帝曰其生病何如岐伯曰厥陰司天客勝則耳

阿六

六二

鳴掉眩甚則欬主勝則背脇痛舌難以言五五

歲也少陰司天客勝則欬嚏頸項強肩背脊熱頭

痛少氣發熱耳聾目瞑甚則眇腫無澀瘡瘍欬喘主

勝則心熱煩躁甚則脇痛支痛五子五大陰司

天客勝則首面肘腫呼吸氣喘主勝則背腹痛

食已而膈五丑五少陽司天客勝則丹於外發

及為丹熛瘡瘍嘔逆喉痺頭痛嗌腫耳聾血溢

內為癰癧主勝則背滿欬仰息甚而有血手執

五寅五陽明司天清復內餘則欬衄嗌塞心滿

中熱欬不止而白血出者死復謂復舊也白血謂欬出血也

血似肉似肺者五卯五酉歲也。○新校正云詳此不言客勝主勝者以金居火位無客勝之理故也。大陽司天客勝則脊中不利出清涕感寒

則欬主勝則喉嗑中鳴。五辰五戌歲也。厥陰在泉客勝

則大關節不利內為痙強拘瘰外為不便主勝

則筋骨繇併腰腹時痛。五寅五申歲也。少陰在

泉客勝則腰痛死股膝髀腓足病發熱以酸

附腫不能久立溲便變主勝則厥氣上行心痛

發熱蒿中衆痺皆作發於臑脇魄汗不藏四逆

而起。五卯五酉歲也。大陰在泉客勝則足痿下重便溲

不時濕客下焦發而濡寫及為腫隱曲之疾主

勝則寒氣逆滿食飲不下其則為疝。五辰五戌歲也。隱曲

之疾謂隱蔽委曲之處病也。少陽在泉客勝則腰腹痛而反

惡寒甚則下白濁白主勝則熱反上行而客於

心心痛發熱格中而嘔少陰同候。五巳五癸歲也。陽明

在泉客勝則清氣動下少腹堅滿而數便寫主

勝則腰重腹痛少腹生寒下為驚漉則寒厥於

腸上衝胃中甚則喘不能久立。五子五午歲也。驚漉也言如鴨

之後大陽在泉寒復內餘則腰尻痛屈伸不利

股脛足膝中痛。五丑五未歲也。○新校正云詳

此不言客主勝者蓋大陽以水居水位故帝曰善治之柰何岐伯曰高者抑之

下者舉之有餘者折之不足者補之佐以所利

和以所宜必安其主客適其寒温同者逆之異

者從之高者抑之制其勝也下者舉之濟其弱也

全其氣也雖制勝扶弱而客主須安一氣失所則示措更作榛棘互與各伺其便不相得志內淫外并而危敗之由作矣同謂寒熱温清氣相比和者氣相得者

則逆所勝之氣以治之不相得者則順所不勝氣以治之治火勝負欲益者以其味欲寫者亦

以其味勝與不勝皆折其氣也帝曰治寒以熱

何者以其性躁動也治熱亦然

治熱以寒氣相得者逆之不相得者從之余已

知之矣其於正味何如歧伯曰木位之主其寫

以酸其補以辛木位春分前六十日初之氣也火位之主其

寫以甘其補以鹹君火之位春分之後六十一日二之氣也相火之位夏至

前後各三十日三之氣也二火土位之主其寫

以苦其補以甘土之位秋分前六十日四之氣也金位之主其

寫以辛其補以酸金之位秋分後六十日五之氣也水位之主

其寫以鹹其補以苦水之位冬至前後各六十日終之氣也厥陰

之客以辛補之以酸寫之以甘緩之少陰之客

以鹹補之以甘寫之以鹹收之新校正云按此氣法時論云心

甘緩急食酸以收之心欲更急食鹹以更急食酸以收之心欲更急食大陰之客以

甘補之以苦寫之以甘緩之少陽之客以鹹補

之以甘寫之以鹹更之陽明之客以酸補之以

辛寫之以苦泄之大陽之客以苦補之以鹹寫

之以苦堅之以辛潤之開發腠理致津液通氣

也客之部主各六十一日居無常所隨歲遷移客勝則寫客而補主主勝則寫主而補客應

隨當緩當急以治之帝曰善願聞陰陽之三也何謂歧伯

曰氣有多少異用也大陰為正陰大陽為正陽

少陽又次為陽明又次為厥陰厥陰為盡義具靈樞繫日月論中○新按正云按天元紀大論

云何謂氣有多少故曰三陰三陽也帝曰陽明何

謂也歧伯曰兩陽合明也靈樞繫日月論曰辰

明已者四月主右足之陽明帝曰厥陰何也歧

伯曰兩陰交盡也靈樞繫日月論曰戌者九月主

左足之厥陰兩陰帝曰氣有多少病有盛衰新

交盡故曰厥陰也論云形有盛衰治有緩急方有大小願聞其約

柰何歧伯曰氣有高下病有遠近證有中外治

有輕重適其至所為故也藏位有高下府氣有

用有輕重調其多少和其緊慢令藥大要曰君

一臣二奇之制也君二臣四偶之制也君二臣

三奇之制也君三臣六偶之制也奇謂古之單

複方也單複一制皆有大小故奇方云君一臣

二君二臣三偶方云君二臣四君三臣六也病故曰近者奇之遠者偶

之汗者不以奇下者不以偶補上治上制以緩

補下治下制以急急則氣味厚緩則氣味薄適
其至所此之謂也汗藥不以偶方氣不可以外
而致過治上補上方迅速則上不住而迫下治
下補下方緩慢則滋道路而力又微制急方而
氣味薄則力與緩等制緩方而氣味厚則勢與
急同如是為緩不能緩急不能急厚而不厚薄
而不薄則大小非制輕重無度則虛實寒熱病
藏府紛拏無由致埋豈神靈而可望安哉

所遠而中道氣味之者食而過之無越其制度

也假如病在腎而心之氣味弱而冷足仍急過

遠近是故平氣之道近而奇偶制小其服也遠

而奇偶制大其服也大則數少小則數多多則

九之少則二之湯丸多少凡如此也近遠謂府

脾胃居中心三陽

膈膽亦有遠近

身三分之上

為近下為遠也或識見高遠權以合宜方奇而
分兩偶方偶而分兩奇如是者近而偶制多數
服之遠而奇制少數服之則肺服九心服七脾
服五肝服三腎服一為常制矣故曰小則數多
大則數少○新按正云詳注云三陽胞膈膽一
本作三腸胞膈膽再詳三陽無義三腸亦未為
得腸有大小并膈腸為三今已云胞膈則不得
云三腸三當作切奇之不去則偶之是謂重方偶之
不去則反佐以取之所謂寒熱溫涼反從其病
也方與其重也寧輕與其毒出寧善與其大也
寧小是以奇方不去偶方主之偶方病在則
反其一佐以同病之氣而取之也夫熱與寒皆
寒與熱違微小之熱為寒所折微小之冷為熱
所消其甚大寒熱則必能與違性者爭雄能與異
氣者相格聲不同不相相應氣不同不相合如是
則且揮而不敢攻之攻之則病氣與藥氣抗衡
而自為寒熱以開閉固守矣是以聖人反其佐

以同其氣令身氣應合復令其熱參合使其終
異始同燥潤而敗堅剛強必折柔脆同消尔
須酌帝曰善病生於本余知之矣生於標者治

之柰何歧伯曰病反其本得標之病治反其本

得標之方言少陰大陽之二帝曰善六氣之勝

何以候之歧伯曰乘其至也清氣大來燥之勝

也風木受邪肝病生焉流於熱氣大來火之勝

也金燥受邪肺病生焉流於熱氣大來火之勝

也按甲乙經迴寒氣大來水之勝也火熱受邪心

病生焉流於濕氣大來土之勝也寒水受邪

腎病生焉流於風氣大來木之勝也土濕受邪

脾病生焉流於所謂感邪而生病也外有其氣

中外不感因而乘年之虛則邪甚也外有清邪

年火不足外有熱邪年水不足外有濕邪是年之虛

也歲氣不足失時之和亦邪甚也六氣臨統

外邪乘其甚也位乘相克遇月之空亦邪甚也謂

之內藏相應邪復甚也氣大至重感於邪則病危矣年已不足

也弦前下弦後月輪中空也氣大至重感於邪則病危矣年已不足

也感也年已不足天氣不結欲病之不危可乎有

勝之氣其必來復也天地之氣不能相無故帝

曰其脈至何如歧伯曰厥陰之至其脈弦而滑

不端直長亦病不當其位亦病位不能弦亦病

少陰之至其脉鈞

來盛去衰如偃帶鈞是謂鈞

當其位亦病來不盛去不盛亦病不

大陰之至其脉

沈不沈下也按之乃得下諸位脉也沈甚則病少

陽之至大而浮浮甚則病大謂稍大諸位脉也大

不浮亦病位不大不浮亦病不當陽明之至短而

潛往來不利是謂潛也往來不遠是謂短也短

亦病位不能潛其則病不知不潛亦病不當其病

短潛亦病不能大陽之至大而長往來遠是謂長

則病長而不大亦病位不能長大而長亦病至而和則

平不其位亦病位不能長大而長亦病至而和則

味沈而附骨浮高於皮潛而止住短如脉至而

黍大如帽替長如引繩皆謂至而大其也

反者病應弦反潛應大反細應沈反浮應細

之候有是皆為氣反常平至而不至者病氣位已

應也未至而至者病六按曆古之凡得節氣營年

脉象改易而應之氣序未移而陰陽易者危應不

天常氣見交錯失其位更見之陰位見陽

危○新校正云按六微旨大論云帝曰其有至

而不至者有至而不至有至而不至也此伯曰至

氣有餘也帝曰至而不至來氣不及也未至而

曰應則順否則逆逆則變生變生則病帝曰請

言其應也岐伯曰物生其應也氣脉其應也所謂

脉應也此帝曰六氣標本所從不同柰何岐伯

曰氣有從本者有從標本者有不從標本者也

帝曰願卒聞之岐伯曰少陽大陰從本少陰大

陽從本從標陽明厥陰不從標本從乎中也少陽

之本火大陰之本濕本末同故從本也少陰之本熱其標陰大陽之本寒其標陽本末異故從

本從標陽明之中大陰厥陰之中少陽本末與中不同故不從標本從乎中也從本從標從中

皆以其為化生之用也故從本者化生於本從標本者有

標本之化從中者以中氣為化也化謂氣化之元主也亦有者

以元主氣用寒熱治之○新校正云按六微旨上論云少陽之上火氣治之中見陽明厥陰之

上燥氣治之中見大陰大陽之上寒氣治之中見少陰厥陰之上風氣治之中見少陽少陰之

上熱氣治之中見大陽大陰之上濕氣治之中見陽明所謂本也本之下中見也見之下氣

應其象此之謂也帝曰脉從而病反者其診

何如岐伯曰脉至而從按之不鼓諸陽皆然言

熱而脉數按之不動乃寒帝曰諸陰之反其脉

何如岐伯曰脉至而從按之鼓甚而盛也形諸

按之而脉氣鼓擊於手下盛者是故百病之起

有生於本者有生於標者有生於中氣者有取

本而得者有取標而得者有取中氣而得者有

取標本而得者有逆取而得者有從取而得者

反佐取之是為逆取奇偶取之是為從取寒逆

正順也若順逆也寒盛格陽治熱以熱之類皆謂之

逆外雖用逆中乃順也此逆乃正順也若寒格陽而治以寒熱拒寒而治以熱也則雖順中

生病者治其本先熱而後生中滿者治其標
病而後治者治其本先治其病而後生他病者治其
本必且調之乃治其本先治其病而後生他病者治其
治其標先中滿而後治其標心者治其本人有客氣
有同氣小大不利治其標小大治其本病發而
而有餘本而標之先治其本後治其標病發而
不足標而本之先治其標後治其本謹察間甚
以意調之問者并治其標後治其本謹察間甚
後生病者治其本帝曰勝復之變早晏何如岐
此經論標本尤詳

伯曰夫所勝者勝至已病病已温温而復已萌

也復心之温天所復者勝盡而起得位而甚勝

有微甚復有少多勝和而和勝虛而虛天之常

也帝曰勝復之作動不當位或後時而至其故

何也言陽盛於夏陰盛於冬清盛於秋温盛於春

岐伯曰夫氣之生與其化衰盛異也寒暑

温涼盛衰之用其在四維故陽之動始於温盛

於暑陰之動始於清盛於寒春夏秋各差其

分言春夏秋各差其分也即

未申之月秋之凉正在戌亥之月冬之寒正在

丑寅之月春之始於仲春夏之始於仲夏秋之始於仲

秋冬之始於仲冬故丑之月陰結層冰於厚地未

之月陽始於仲春故丑之月陰結層冰於厚地未

物堅辰之月風扇和舒而陳柯榮秀此則氣差

其分昭然而不可蔽也然陰陽之氣生發收藏
與常法相會微其氣化及在入之應則四時每
若其日數與常法相違從差法乃正當之也
故大要曰彼春之暖為夏之暑彼秋之忿為冬
之怒謹按四維斥候皆歸其終可見其始可知

乃逆故方若 故曰知標與本用之不相明知逆

順是逆也 順正行無問此之謂也 不知是者不足以言診

足以亂經故大要曰粗工噫噫以為可知言熱

未已寒病復始同氣異形迷診亂經此之謂也

噫噫悅也言心意怡悅以為知道終盡也六氣

之用粗之與工得其半也厥陰之化粗以為寒

其乃是用失其道故其學問識用不達王之謂也

矣夫大陽少陰各有寒化然量其標本應用則

正反矣何以言之大陽本為寒標為熱少陰本

為熱標為寒方之用亦如是也厥陰陽明中氣

亦爾厥陰之中氣為熱陽明之中氣為濕此二

氣亦反其類大陽少陰也然大陽與少陰有標

本用與諸氣不同故曰同氣異形也夫一經之標

本寒熱既殊言本當究其標論標合尋其本言

氣不窮其標本論病未辨其陰陽雖同一氣凡

主且阻寒溫之候故心迷正理治 夫標本之道

益亂經呼曰粗工名膺其稱爾

要而博小而大可以言一而知百病之害言標

與本易而勿損察本與標氣可令調明知勝復

為萬民式天之道畢矣 天地變化尚可知盡知况

經之要持法之宗為天下師尚卑其道萬民之

式豈曰大哉。新校正云按標本病傳論云有

其在標而求之於標有其在本而求之於本有

其在本而求之於標有其在標而求之於本故

治有取標而得者有取本而得者有逆取而得

者有從取而得者故知逆與從正行無問知標

本者萬舉萬當不知標本是為妄行夫陰陽逆

從標本之為道也小而大言一而知百病之害

少而多淺而博可以言一而知百也以及淺而知

深察近而知遠言標明本易而勿及治反為逆

治得為從先病而後逆者治其本先逆而後病

者治其本先寒而後生者治其本先熱而後

此之謂也

言氣之少壯也陽之少為壯其壯也為暖其壯也

謂少壯之異氣蓋用之盛衰但立盛衰於帝曰

四維之位則陰陽終始應用皆可矣

差有數乎歧伯曰又凡三十度也度日也帝曰

元正紀大論云差有數乎日後皆三十度者此文為畧

而有奇也此云三十度也者此為畧

其脉應皆何如歧伯曰差同正法待時而去也

脉亦差以隨氣應也待差脉要曰春不沈夏不

日足應王氣全而乃去也

弦冬不瀼秋不數是謂四塞天地四時之氣開

沈甚曰病弦甚曰病瀼甚曰病數甚曰病但急

氣是則為平形見大甚則為力致參見曰病復

以力而致變能以平乎故其皆病

見曰病未去而去曰病去而不去曰病和謂氣

來見復見謂再見已衰已死之氣也去謂王已

而去者也日行之度未出於差是為大氣未出

日度過差是為天氣已去而反者死見數冬見

脈尚在既非得應故曰病

緩春見瀼是謂反也犯違天命生其能久乎

新校正云詳上文秋不數是謂四塞此注云秋

見數是謂反蓋以脉差只在仲月差之度盡故

而數不去謂秋之季月而脉尚數則為反也

曰氣之相守司也如權衡之不得相失也

天地之氣寒暑相對温清相望如持秤也高者

石下者否兩者齊等无相奪倫則清靜而生化

各得其夫陰陽之氣清靜則生化治動則苛疾

起此之謂也動謂變動動常平之候而為疾清也

論云成敗倚伏生乎動帝曰幽明何如歧伯曰

動而不已則變作矣

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

兩陰交盡故曰幽兩陽合明故曰明幽明之配

寒暑之異也

初陰交盡於戌亥兩陽合明於辰巳靈樞繫日月論云亥十月左足

之厥陰辰三月左足之陽明巳四月右足之陽明

此兩陽合於前故曰陽明然陰交則幽陽合則明幽明之象當由是也寒暑之位西南東北幽明

位西北東南幽明之配寒暑之位西南東北幽明

新按正云按大始天元冊文云幽明幽位寒暑

謂分至則氣同分則氣異所謂天地之正紀也

因幽明之問而形斯義也言冬夏二至是天地

氣主歲至其所在也春秋二分是問氣初二四

五四分則氣異其所言二至二分之氣配者此所謂是天地氣

帝曰夫子言春秋氣始于前冬夏

氣始于後余已知之矣然六氣往復主歲不常

也其補寫奈何以分至明六氣分位則初氣四

日為紀法三氣六氣始於立春立秋前各一十五

五中為紀法由是四氣前後之紀則三氣六氣

氣始於後也然以三百六十五日易一氣一歲

天地不同補寫之方應知先後以復以問之也

岐伯曰上下所主隨其彼利正其味則其要也

左右同法大要曰少陽之主先甘後鹹陽明之

主先辛後酸太陽之主先鹹後苦厥陰之主先

酸後辛少陰之主先甘後鹹大陰之主先苦後

甘佐以所利資以所生是謂得氣主謂主歲得

也得其性用則舒卷由人不得性用則動生率

皆豈馳邪之可均乎適足以伐天貞之妙氣爾

如是先後之味皆謂有病先寫之而後補之也帝曰善夫百病之生也

皆生於風寒暑濕燥火以之化之變也風寒暑

天之六氣也靜而順者為化動經言盛者寫之而變者為變故曰之化之變也

虛者補之余錫以方士而方士用之尚未能十

全余欲令要道必行桴鼓相應由按刺雪汗工

巧神聖可得聞乎鍼曰上巧藥曰神聖之新技

之神聞而知之謂之聖問而知之謂之工切脈而知之謂之巧以外知之曰聖以內知之曰神

歧伯曰審察病機無失氣宜此之謂也得其機

小而功大用也帝曰願聞病機何如歧伯曰諸風

掉眩皆屬於肝風性動木諸寒收引皆屬於腎

收謂斂也引謂急也諸氣臌脹皆屬於肺高秋

寒物收縮水氣同也諸氣鬱鬱皆屬於脾高秋

屬氣煙集涼至則氣熱復甚則氣強微其物象

屬同諸濕腫滿皆屬於脾水薄則水淺土厚則

則濕濕氣之諸熱瘧瘵皆屬於火火象諸痛痒

瘡皆屬於心起皆息生痛痒瘡瘵生於心也

諸厥固泄皆屬於下下謂下焦肝腎氣也夫守

要肝之氣也故諸厥固泄皆屬下也厥謂氣逆

固謂禁固諸有氣逆上行及固不禁出入无度

燥濕不相皆由諸痿喘嘔皆屬於上上謂上焦

炎熱薄燥心之氣也承熱分化肺之氣也熱鬱

非上病王注不解所以屬上之由使後人疑議

痿躄是故云屬於上諸禁鼓慄如喪神守皆屬於

火內熱之諸瘕項強皆屬於濕大陽傷濕諸逆衝上皆

屬於火炎上之諸脹腹大皆屬於熱熱鬱於內

諸躁狂越皆屬於火及四末也諸暴強直皆屬

於風陽內鬱而諸病有聲鼓之如鼓皆屬於熱

謂有諸病附腫疼酸驚駭皆屬於火諸氣諸轉

反戾水液渾濁皆屬於熱反戾筋轉也諸病水

液澄澈清冷皆屬於寒上下所出及諸嘔吐酸

暴注下迫皆屬於熱酸酸水故大要曰謹守病

機各司其屬有者求之無者求之盛者責之虛

者責之必先五勝疎其血氣令其調達而致和

平此之謂也深乎聖人之言理宜然也夫如大寒

而甚熱之不熱是無火也熱來復去晝見夜伏

夜發晝止時節而動是無火也當助其心又如

火熱而甚寒之不寒是無水也當助其腎內格嘔逆

往來時動時止是無水也當助其腎內格嘔逆

食不得入是有火也病嘔而吐食入反出是無

火也暴速注下食不及化是無水也溏泄而久

止發無恒是無水也故心虛則熱則生熱腎盛則生

寒腎虛則寒動於中心虛則熱收於內又熱不

得寒是無火也寒不得熱是無水也夫寒之不

寒責其無水熱之不熱責其無火熱之不

心之虛寒之不

上下元氣補之盛者為之居其中間疎者壅塞令
是以方有治熱以寒寒之而火食不入攻寒以
熱熱之而昏寐以生此則氣不疎通壅而為是
也紀於水火氣可知故曰有者求之無者求

之盛者責之虛者責之令氣通調妙之道也五
勝謂五行更勝也先以五行寒暑溫涼濕酸鹹
甘辛苦相

帝曰善五味陰陽之用何如此岐伯曰
勝為法也

辛甘發散為陽酸苦涌泄為陰鹹味涌泄為陰

淡味滲泄為陽六者或收或散或緩或急或燥

或潤或栗或堅以所利而行之調其氣使其平

也涌吐也泄利也滲泄小便也言水液自通腸
必別汁滲入膀胱之中脫氣化之而為溺以

收甘緩苦堅鹹栗又云按載氣法時論云辛散酸
或散或收或緩或急或堅或栗或散或收或
四時五藏病隨五味所宜也帝曰非調氣而

得者治之奈何有毒無毒何先何後願聞其道

夫病生之類其有四焉一者始因氣動而內有
所成二者因氣動而外有所成三者不因氣動

而病生於內四者不因氣動而病生於外夫因
氣動而內成者謂積聚癥瘕癰疽起結核癩

癰腫之類也外成者謂腫痛痺之類也夫因
浮腫曰赤標胎胎腫痛痺之類也夫因氣動而

病生於內者謂留飲之類也夫因勞損宿食積
熱惡毒喜怒怨怒想慕憂結之類也夫因外者謂
寒暑濕

所射刺割捶仆之類也如是四類有獨治內而
愈者有兼治內而愈者有獨治外而愈者有兼

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

治外而愈者有先治內而愈者有須齊毒而
治外而愈者有後治外而愈者有須齊毒而

岐伯曰有毒無毒所治為主適大小為制也

能破積愈疾滿急脫死則為良力非必要言以
先毒為是後毒為非無毒為非有毒為是必量
病輕重大帝曰請言其制岐伯曰君一臣二制

小制之也

之小也君一臣三佐五制之中也君一臣三佐

九制之大也寒者熱之熱者寒之微者逆之甚

者從之夫病之微小者猶人少也遇草而病得

氣以折之攻之病之大甚者猶龍火也得濕而

焔遇水而燻不知其性以水濕折之適足以光

焔誦天物窮方止矣識其性者反常之理以火

逐之則燻灼自消焔光撲滅然逆之謂以寒攻

熱以熱攻寒從之謂攻以寒熱雖從其性用不

必皆同是以下文曰逆者正治從者反治從少

從多觀其事也此之謂乎○新校正云按神農

三藥有君巨佐使以相宣攝合和宜用一君二

君三佐五使又可一堅者削之客者除之勞者

温之結者散之留者攻之燥者濡之急者緩之

散者收之損者益之逸者行之驚者平之上之

下之摩之浴之薄之劫之開之發之適事為故

量病證候帝曰何謂逆從岐伯曰逆者正治從

者反治從少從多觀其事也言逆者正治也從

而正治則以寒攻熱以熱攻寒雖從順病氣乃

反治法也從少謂一同而二異從多謂二同而

三異也言尽同帝曰反治何謂岐伯曰熱因寒

用寒因熱用塞因塞用通因通用必伏其所主

而先其所因其始則同其終則異可使破積可

使潰堅可使氣和可使必已天大寒內結積聚

格熱反縱反縱之則痛發尤甚攻之則熱不得

前方以蜜煎烏頭佐之以熱蜜多其藥服已便

消是則張公從此而以熱因寒用也亦有火氣動

服冷已過熱為寒格而身冷嘔噦噤乾口苦照

熱好寒寒議做同咸呼為熱冷治則甚其如之
何逆其好則拒治順其心則加病若調寒熱逆
性便發由是病氣隨愈嘔噦皆除情且不違而
致大益醇酒冷飲則其類矣是則熱因寒用也
所謂惡寒者凡諸食餘氣主於生者○新校正
云詳主字疑誤上見之已嘔也又病熱者寒攻
不入惡其寒勝熱乃消之已嘔也又病熱者寒
之則不入以成豆諸冷藥酒漬或溫而服之酒
熱氣同固無違作酒熱既盡寒藥已行從其服
食熱便隨散此則寒復因熱用也或以諸冷物
齊和之服之食及粉菜乳以椒薑橘熱齊和之
又熱也又熱在下焦治亦以椒薑橘熱齊和之
其類也又熱在下焦治亦以椒薑橘熱齊和之
焦氣壅也又熱在下焦治亦以椒薑橘熱齊和之
也欲散滿則恐虛甚食下補增粗工之見無能
則下焦轉虛補虛則其下滿滋甚醫病參議言
昔同不救其虛且攻其滿藥入則減藥過依然
故中滿下虛其病常在乃不知踈啓其中峻補
於下少脈則資壅多服則宣通由是而療中滿

自除下虛斯實此則塞因塞用也又太熱內結
注泄不止熱宜寒療結復復除以寒下之結散
愈而復發則綿歷歲年以熱下之寒去利上亦其
類也投寒以熱涼而行之投熱以寒溫而行之
始同終異斯之謂也諸如此等其徒甚繁舉
宗兆猶是反治之道斯其類也○新校正云按
五常行政大論云治熱以寒溫而行之治寒以
用寒而行之熱用之義也帝曰善氣調而得者何如

歧伯曰逆之從之逆而從之從而逆之踈氣令

調則其道也而逆謂逆病氣以正治從謂從病氣

從其病以反取令彼和調故曰逆從也其從順

也帝曰善病之中外何如歧伯曰從內之外者

調其內從外之內者治其外其各源從內之外而

盛於外者先調其內而後治其外從外之內而

盛於內者先治其外而後調其內皆謂先除其根屬後調其

條中外不相及則治主病中外不相及病也帝曰善

火熱復惡寒發熱有如瘧狀或一日發或間數

日發其故何也歧伯曰勝復之氣會遇之時有

多少也陰氣多而陽氣少則其發日遠陽氣多

而陰氣少則其發日近此勝復相薄盛衰之節

瘧亦同法陰陽齊等則一日之中寒熱相半陽

少陰多則隔日發而先寒後熱雖勝復之氣若

或類三日發而六七日止或隔十日發而四五日

止者皆由氣之多少會遇與不會遇也俗見不

遠乃謂鬼神暴疾而久祈禱避匿病勢已過旋

至其變病者頑段自謂其分致令寬寬集於廣

路天死盈於曠野仁愛鑿必能不傷楚習俗既

久難卒厘革非復可收末如之何悲哉悲哉

帝曰論言治寒以熱治熱以寒而方士不能廢

繩墨而更其道也有病熱者寒之而熱有病寒

者熱之而寒二者皆在新病復起奈何治謂治

病不衰退反因藥寒熱而隨生寒熱病之新者

也亦有止而復發者亦有藥在而除藥去而發

者亦有全不息者方士若廢此繩墨則無更新

之法欲依標格則病熱不除捨之則阻彼凡情

道何恃而為因藥病生新舊相對欲求其愈安

可柰歧伯曰諸寒之而熱者取之陰熱之而寒

者取之陽所謂求其屬也言益火之源以消陰

平故曰求其屬也夫粗工補淺季未精深以熱
攻寒以寒療熱治熱未已而冷疾已生攻寒日
深而熱病更起熱起而中寒尚在寒生而外熱
不除欲攻寒則懼熱不前欲療熱則思寒又止
進退交戰危亟已臻豈知藏府之源有寒熱溫
涼之主哉夫取心者不必齊以熱取腎者不必
齊以寒但益心之陽寒亦通行強腎之陰熱之
猶可觀斯之故或治熱以熱治寒以寒萬幸萬
生孰知其意思方智極理盡辭窮嗚呼人帝曰
之死者豈謂命不謂方士愚昧而殺之耶帝曰
善服寒而反熱服熱而反寒其故何也歧伯曰
治其王氣是以反也

物躰有寒熱氣性有陰陽
觸王之氣則強其用也夫
肝氣溫和心氣暑熱肺氣清涼腎氣寒冽脾氣
兼并之故也春以清治肝而反溫夏以冷治心
而反熱由補益以溫治肺而反清冬以熱治腎而反
寒蓋由補益王氣大甚也補王大甚則藏之寒
多矣

帝曰不治王而然者何也歧伯曰悉乎

哉問也不治王味屬也夫五味入胃各歸所喜

攻酸先入肝苦先入心甘先入脾辛先入肺鹹

先入腎新校正云按宣明五氣篇云五味所入
酸入肝辛入肺苦入心鹹入腎甘入脾

是謂久而增氣物化之常也氣增而久天之由

也夫入肝為溫入心為熱入肺為清入腎為寒
入脾為至陰而四氣兼之皆為增其味而益

其氣反熱者此其類也餘味皆然但人意疎忽不

能精候耳故曰久而增氣物化之常也氣增不

已益歲年則藏氣偏勝氣有偏勝則有偏絕藏
有偏絕則有化藥集商較服餌曰藥不具五味
是以正理觀化藥集商較服餌曰藥不具五味
不備四氣而久服之雖且獲勝益必致暴天
此之謂也絕粒服餌則不暴亡斯何由哉無五
穀味資助故也復帝曰善方制君臣何謂也歧
令食穀其亦天馬

伯曰主病之謂君佐君之謂臣應臣之謂使非

上下三品之謂也

上藥為君中藥為臣下藥為佐使所以異善惡之名位服

餌之道高從此為法治病之道不必皆然以主病者為君佐君者為臣應臣之用者為使皆所

以贊成方用也

帝曰三品何謂歧伯曰所以明善惡之

殊貫也

三品上中下三品此明藥善惡不同性

主養命以應天中藥為臣土養性以應地帝曰善病

之中外何如

前問病之中外謂調氣之法今此未盡故復問之此下對當次前求

其屬也之下應古之錯簡也

歧伯曰調氣之方必別陰陽定

其中外各守其鄉內者內治外者外治微者調

之其次平之盛者奪之汗之下之寒熱溫涼衰

之以屬隨其攸利

病有中外治有表裏在內者以內治法和在表者以外

治法和其氣其次大者以平氣法平之盛甚不已則奪其氣令其衰也假如小寒之氣溫以和之

大寒之氣熱以取之甚寒之氣則下奪之奪之不巳則逆折之折之不盡則求其屬以衰之小

熱之氣涼以和之大熱之氣寒以取之甚熱之氣則汗發之發之不盡則逆制之制之不盡則

求其屬以衰之故曰汗之逆制之制之不盡則溫涼衰之以屬隨其攸利攸所也謹道如法

萬舉萬全氣血正平長有天命

守道以行幸無不中故能驅役

草石召遣神靈調御除陽蠲除瘕疾血氣保平

和之候天眞無耗竭之伯夫如是者蓋以舒卷神內守壽命靈長帝曰善

新刊黃帝內經素問卷二十二



